

中国はベトナム戦争にどう関与していたか

朱 建榮

今までのベトナム北部から、南から、また韓国からの証言をふりかえり、ひとつ共通点があることに気づきました。それは、それぞれが、これまでも、この戦争についてあまり思い出したくないと思ってきたし、今もそう思っているということです。それはなぜか。中国を含め、あるいは旧ソ連、アメリカを含め、関係諸国ともこの戦争について当時からいろんな判断がありました。大義名分と主張するものが違う。いろんなものを織り交ぜてやってきたということもあって、それを進んで公表するのに、いささか躊躇があったということは考えられます。国民に今までの自分のやり方の正当性を主張してきた。しかし事実は必ずしもそうではない。この国民への総括反省がまだ行なわれていないと言うことができます。もちろん、冷戦が終わり、世界各国の人も、かつてのような悲惨な事実を二度と見たくない。ですから早く乗り越えていこうという祈るような気持ちもあって、結局当時の現実を見つめようとしないうちに繋がったと思います。

す。

もう一点、このシンポの冒頭で、東京外語大の岩崎稔先生がわざわざお断りされたように、今日はあえてアメリカの学者に出てもらっていないということですが、わたしは、結果的に見てこれがよかったと思います。冷戦終結後、アメリカが今唯一の超大国になっていて、おそらく今日触れた各方面とも、アメリカの前では言いづらい部分もあるんじゃないかなと思うんです。そういう意味で今日はアジアの視点を中心に議論しようという東京外大のこの努力、この設定に感謝の意を表したいと思います。

わたしが取り上げるテーマですけれども、中国のベトナム戦争との関わりです。それは、おそらく戦後史の中でも最大の謎の一つです。すなわち中国が北ベトナムにのべ三十二万人以上の支援部隊を送り、ピークのときには十七万以上の中国軍が北ベトナムに駐屯していたんです。アメリカもまた中国軍の駐屯地に向けて繰り返し爆撃をし、アメリカの爆撃によって中国軍は少な

42 中国はベトナム戦争にどう関与していたか

くとも千数百人が死亡、四千人以上が重傷を負っています。また中国軍の記録によれば、千七百七機の米軍機が中国軍によって撃墜されたということですが、にもかかわらず、アメリカも中国もベトナム戦争を通して中国軍が北ベトナムにこれほど多く駐屯したということ、両軍が熱い戦闘をかわしたということについて公式には一言も触れていないんです。

戦後になっても——七〇年代の末にようやく少し出たんですが——今でも、ヴェトナム内部でも、中国内部でも、アメリカの中でも、すすんでその歴史の総括はあまり行われていないわけですね。当時において公の事実であったにもかかわらず、なぜ隠し通していたのか。その理由は、あとで触れるそれぞれの考慮、関係してくると思います。この戦争が米中間の直接戦争に燃え移らないようにするということは、中国にとって最大の目標の一つだったし、アメリカにとってもそれがもっとも重要な点の一つだったといえます。中国は、アメリカと直接対戦してないということで、他の場所でもとくにアメリカを名指して対決する必要はなくなります。朝鮮半島の三八度線を境界線に南北両軍が依然待機していたわけですね。そこで公式に戦争するとすれば、

朝鮮半島でも戦わない理由がなくなるわけです。一方アメリカにとっても中国の公式の参戦を認めてしまうと、アメリカ国内で行っていたこの戦争についての説明をかなり変えざるをえない。それまでは、この戦争は共産主義の拡張ドミノを防ぐためのものだと言い続けながらも、同時にこれは、けっして世界大戦にはならないということを、国内向けに言っていたわけです。一時期、朝鮮戦争でもベトナム戦争でもアメリカが中国に対してもっと強い軍事圧力を加えようとしたときに、イギリスが先にアメリカのところに飛んで絶対中国を巻き込んだ戦争にしちゃいけない、そうでないと世界大戦になるということを警告しました。

このような、当時の複雑な背景の中で結局その事実がつい最近まであまり公表されていなかったんですが、わたしは、それを検証してみようと考えて、最近『毛沢東のベトナム戦争』という本を出しました。ここでは、具体的な史実については時間の関係であまり詳しく説明いたしません。簡単に言いますと、六〇年代の初め頃から、中国と北ベトナムとの間に、米軍が戦争を北ベトナムないしは中国に拡大する可能性があると、そういうふうに読んでいました。そこで六三年に中越間の秘密

協定が交わされ、米軍が北ベトナムに地上軍が攻めてきたら中国軍が参戦し、一方北ベトナム人民軍は南に入って、アメリカの背後をくぐって戦争すると、そのような合意ができていました。実際に六五年の夏の中国軍の正式の派兵に至るまで、ほぼこのような合意に沿って準備が進められていたのです。

六五年の二月にアメリカが北に対して恒常的な北爆を始めました。中国が特に警戒したのはその三月五日に米軍の海兵隊がダナンに上陸し、それまでの米軍顧問の指導による戦争から、直接米軍の地上軍が参加する戦争になったことです。中国は、それを非常に重くみて、いよいよ決断せざるを得ないというところに来たという判断があったわけです。四月の初めに米中間で、まさにこの油の上に一本の火がつく事件がありました。米軍の戦闘機が中国軍の介入などを警戒して、北ベトナム沖の海南島上空に侵入したときに、中国軍の空軍機がスクランブルを起こして、そこで直接戦いになったんです。ただ、その戦いではアメリカも中国もおそらくその準備をしていなかったもので、アメリカ軍が慌ててミサイルを発射し、結局アメリカ軍は味方の飛行機を撃墜したんです。それが海南島に落ちたので中国はこれを最大の危機と考

えました。米軍がいよいよ中国にこのような戦争を仕掛けてくるのだと、口実を作って中国領まで空軍を追撃したり北ベトナムへの陸軍派遣をしようとしたんではないか、という判断になったわけです。

その後の六五年四月から六月までの、日本の各新聞を検証してみました。当時中国の中で戦争状態に近いような雰囲気があるといった話はほとんど伝わっていません。日本の報道は大体アメリカ側の発表をうのみにしたものです。しかし、実際に四月十二日には中国共産党最高指導部は全国に対し戦争動員令を発表しました。北の軍隊を南の方に配置がえもしました。そしてソ連との対立が一触即発だったんですけれども、急にソ連に対しての呼びかけが柔らかくなって、いざ米軍との戦争になれば中国とソ連はかつてのように肩を並べて戦うだろうという論文が五月九日の時点で発表されたんです。しかし、一方ベトナム戦争に対し中国はいろんな考慮がある。これが米中間の本当の戦争になることを一番避けたかったということでは米軍も同じでした。米中間は中国の建国以後互いに批判をしながらも、つねに裏でいろんなパイプを使って、相手にメッセージを送り、そして相手からもメッセージを

44 中国はベトナム戦争にどう関与していたか

読み取ろうとしたんです。

パイプの一つはワルシャワ条約機構大使級会談です。もう一つは両国とパイプをもつ第三国を通じたものです。五〇年代の朝鮮戦争のときにはインドの中国駐在の大使だったし、六五年の時点ではパキスタンのルートだったんです。しかしそれはいずれも双方の危機を完全に相手に伝えることはできなかったんです。最近アメリカで公表された史料でようやくわかったことに、五月の末にアメリカが中国に対し、われわれは地上軍を北ベトナムまたは中国に出すつもりはない、中国はそれに対し、われわれは南まで地上軍を送るつもりはないというメッセージ高官はイギリスを通じて行われたのです。そのメッセージの交換を間接的に裏づけるものとして、当時の米国務次官補のウィリアム・バンディがラスク国務長官に行った報告の中で、イギリスの中国駐在臨時大使に対し、こういうふうに北京に伝えていいとイギリス側に依頼したという文書が見つかっています。その直後六月九日に中国軍が国境を越えて大挙、北ベトナムに入りました。今の話だと、北ベトナムは中国のこういう極秘事項を知らされていなかったのかという印象をうけますが、実は中国はその情報を確実に北ベトナムとシ

ェアしていました。

中国はそれを次のように伝えました。北にアメリカの地上軍さえ入ってこなければ、中国の後方支援部隊が北に入っても、米中間の戦争はないので、だから北ベトナムは安心してホーチミン・ルートを開拓して南の方に戦いに行けと。そのような合意に至ったわけですね。とくに興味深かったのは一九七二年二月ニクソン訪中で米中は接近したんですが、アメリカは中越の間にくさびを打とうとして、その四月五月から北ベトナムの海岸に対して魚雷を敷設し、北爆を大規模に再開しました。それに対し中国は、一方ニクソン訪中でいろんな関係の緩和を模索しつつ、七二年の五月から七三年の八月まで中国軍はさらに掃海艇、後方部隊を中心に再び大量に派遣し、とくに経済支援はその前より何倍にも増やしました。

では、ここで二番目に、中国軍の出動の狙いとその効果は実際にどうだったのかをちょっと考えてみたいと思います。第一、中国軍の後方部隊の出動というのは、米地上軍の北上を阻止する重しとして大きかったわけですね。戦争というのはまず戦略です。――互いの碁盤の上で、今から見ればあまり重要じゃない遊びのような石を置いて――相手を牽制するというような狙い

があったことは間違いないと思います。米軍もジョンソン大統領は後に、中国軍が南下するかどうかはそのベトナム戦争介入に関する政策決定の外部要因の一つだったと認めています。先ほど言いましたように、北ベトナム軍が戦争を動かすためのホーチミン・ルートの開拓は、ほとんど六五年から大規模に始まったんです。それから南の方に正規軍を送っています。毛沢東の戦略というのは相手の設定した戦場、思惑で戦うのではなく相手の裏で戦うということです。実際に、後に中国と対立したレ・チュアン・ベトナム労働党の書記長も戦後には中国のこの参戦について一定の評価をしていました。七五年の訪中で、「あなたたちがわたしたちに真心を込めた支援をしてくれなかったら、わたしたちはおそらく、さらに二百万から三百万人の余分の犠牲を強いられただろう」と述べました。ただ、ここでは中国軍の参戦は、それがもっぱら相手の国のためであったというつもりはありません。明らかに中国の参戦というのは、次に触れる旧ソ連、ベトナム、そして中国国内の政治などへの関連効果をねらったものだったのです。

ひとつはソ連との間がちょうど決裂寸前に至っていたので、国際共産主義

運動の中で、自分こそ本当にアメリカと戦っているんだと示す必要があった。ソ連は機会主義で、口先では強いことを言うんですけども実際は弱腰だと。そのような言い方で、特に第三世界の共産党からの支持を得ようとした。事実、その後国際共産主義陣営が分裂したとき、ヨーロッパはほとんどソ連派だったんですが、アジア、オセアニア、ラテンアメリカの共産党は多く中国側につきました。

北ベトナムとの関係では、中国自身がそれまでいろんな歴史的交流もあって、もちろん警戒しあう部分もあったんですが、ホーチミンという大きな存在が決定的でした。ホーチミン主席は中国に若いときから頻繁に行き来し、六二年から六九年の九月の死去まで、一、二回を除いて誕生日は全部中国で過ごしてたんです。双方ともプライドの高い民族で警戒しあう部分もあったんですが、ホーチミンの存在で十数年間この蜜月が作られたのです。その間、中国は、北ベトナムに対しわれわれの援助で戦えばいい、どうしてソ連の援助が要るか、と言い続けました。六四年の末にフルシチョフが失脚しましたが、それまでソ連はベトナムに介入しようとしていませんでした。ですが、六五年に入ってからソ連は自分の戦略

で北ベトナムに軍事支援をしつつ、アメリカと駆け引きをするようになりました。中国の影響力を削ぐという戦略です。そこでベトナム側としては、たしかにこれまでは中国側に立ってソ連修正主義批判もやったんですが、今ソ連が強い支援をしてくれる。特に中国にないようなハイテク兵器もくれる。そのなかで中国が、ソ連とつきあうな、と言ってくれば、それに当然不満がでてくるわけです。ファンバンドン元総理に取材したときに、彼はこう言いました。自分が周恩来のところに行って、「周総理、これこれという支援物資が欲しい」と言ったら、周恩来は、全部あげようと言ったそうです。それで、「わかった、ありがとう、次はわたしはモスクワへ行く」と言った途端、周恩来は、なぜモスクワに行く必要があるのか、われわれのところでじゅうぶん足りたのではないかと、そのような話が出るということなのです。

中越間においては中国の支援、つまり軍隊の派遣によってこの結びつきがピークに達した時点で、ソ連という要素と他の要素が新しく入り、中越関係は実はそこで国益上衝突する要素が表面化してきたんです。中国軍の北ベトナム派遣、それは朝鮮戦争のときと同じように、当時北の軍隊はほとんど壊

滅してたので、中国人民志願軍は自分の国内でやったやり方で理想主義的に北朝鮮の民衆のために庭を掃除する、井戸で水を汲み上げて運ぶ、医療活動をしていました。しかしそれと同じやり方を北ベトナムで実行したら、われわれの政権に対する不信感をあおり、中国への別の忠誠心を作るために来ているのではないかとハノイ側に受けとめられた。実際に華僑の問題も複雑に絡んでいたのも、そのような中で支援は欲しいんですけども、自分の民族のプライドや自分の国内——北ベトナムは割に自分の体制が残っていたので——、それは中国軍の出現によって動揺させられたくなかったということがあったわけです。それで、六六年頃から中国軍は、自分の北ベトナム駐在部隊に対し、すすんでベトナム人民には奉仕はしないようにせよ、相手から頼んできたら拒まないけれども、自分からはしないように、そして、なるべく事前にベトナムの政府とも相談してやるようにと、そのような複雑な指示が出るようになりました。

そして、中国軍が参戦したわずか一年後の六六年に、ハノイの『歴史研究』という雑誌に、二千年前に中国の歴史記録に記されている記述をとりあげ、中国と戦ったハイバイチョン姉妹のこ

とを論じた論文を載せはじめました。そんななかで、複雑な、思わぬ方向へことは進んでいったわけです。中国では、毛沢東はさらに内政上の考慮もしていました。当時ソ連の官僚主義を見て、また国内で劉少奇らがソ連の路線に追随しようとしているということを見て、劉少奇らを切って、同時に中国で思想の革命をやって、ソ連と違う理想社会をつくろうと考えたのです。

一方ベトナム戦争では、中国が出なければアメリカに弱く見られるのでとにかく出る。しかし同時にアメリカとは直接対決をしない。そこでアメリカは南部で地上軍を派遣し、北は空爆する、中国は南には出ないが、北には人民解放軍が防御に当たるというような図式に収まったのです。このことは、毛沢東が国内で文化大革命を展開するための、一つの環境的整備にもなったんです。

次に、その効果と影響です。こまかくは言いませんけれども、わたしは、自分の著作のなかで、五つのラインに沿って中国とベトナム戦争の関連を分析してみました。第一に中国とアメリカとの関係。第二に中国とソ連との関係。第三に中国と北ベトナムとの関係。第四に中国の軍事戦略。第五に中国国内、政治闘争との関係ということです。

そのように複合的に分析を進めてみたんですが、面白いことに、実は六四年から六五年にかけて、この転換期を経て、それまでのこの五つのラインの目指す方向がいずれもズレたんです。米中関係、本当の米中接近は七〇年、七一年まで待たなければならなかったんですが、さっき言った最初のメッセージ交換成功、六六年の初めにアメリカは中国を初めてthe People's Republic of China と呼んだんです。ただし、中国国内の文革などで、中国はアメリカのメッセージを取り合おうとはしなかった。しかし、そこで米中両国が朝鮮戦争時代以降の軍事対峙・対決から緩衝地帯を作るようになり、後の米中接近への反転がここではじまったと思われます。

中ソ関係については、六〇年頃から中ソが相当対立関係を深刻化させていたとされているんですけども、実際には六五年までの双方の関係においては、少なくとも党、軍の面でまだ一定のつながりがありました。最後の中ソ間の党のトップの交渉が六四年に行われたんです。しかし、六五年をもって、中ソは完全に党の関係を断絶し、そして軍はソ連軍を敵とみなすことになりました。六五年九月二九日、中国外相陳毅元帥が発表した談話では、これが

48 中国はベトナム戦争にどう関与していたか

らアメリカが攻めてくる場合に、修正主義者（すなわちソ連）が北方からそれに呼応して攻めてくるかもしれないが、われわれはむしろそれを歓迎しよう、そんなことには恐れない、ということをはじめて言明しました。

三番目に中越関係が密接に最大級の交流が行われた六五年に離反が始まったのです。七〇年代に入ると後の中国側の証言でも分かるのですが、今はとにかく北にお金と一定の軍事支援を送って、それで公然と対立するような関係を避けたい、とあります。その後、北ベトナムはソ連と中国の間でますますソ連に偏っていきました。ついに後の中越国境戦争に至ります。

中国の軍事戦略はどうか。それは、建国以後、全てアメリカの東からの攻撃を想定した積極的防御の戦略だったんですが、六五年から数年間の内に、中国は米ソ二方向の防御戦略を取ったんです。米ソ両軍が呼応して北と南を攻めてきたら、中国軍は国土が広いので、いったん引き上げて北の黄河と南の揚子江の間に後退して、そこから反撃に出るという戦略まで作りました。中ソ国境のところでは、かつて日本軍が終戦当時、ソ連軍の機甲部隊を防げなかった荒原地帯だったので、中国はそこに人工の山を作りました。途中で

いくつかの堅塁を作り、ソ連軍の攻撃を阻止し、遅らせるというような戦略もたてました。

最後ですが、中国の内政について言えば、ご存知のように六六年から、文化大革命に突入していくわけですが、指導部内の対決もベトナム戦争がエスカレートする過程で激化したのです。

最後にわたしはこの研究を通じて、今日の各方の話もふまえて、二十一世紀への示唆と教訓にはどういうものがあるかを自分なりにお話したいと思っています。第一に、北ベトナムの勝利。それは外因というよりは、やはり基本的にベトナム民族が自分の独立を、統一を、実現するための戦いだったことです。外因というのはプラス・アルファのものではあっても、その内因がなければこのような勝利はありえなかったと思います。そして、この二十一世紀においても自分の国や民族を守るために、ハイレクスの武器の威力は怖いのですが、しかしやはり自分の民族、自分の国の団結、それがあれば打ち勝つと思います。二十一世紀でも、ただの物量作戦にすべてをかけるということは最後に勝利するとは限りません。昨今アメリカの軍事行動についても、歴史を反省して、もう少し考える必要があるのではないかと思います。

第二に今日の話も踏まえて感じたことですが、戦争はそれぞれの国、当局の思惑で始まります。しかし、最も悲惨な目にあうのは、やはりその国の民衆です。したがって二十一世紀において各国政府が至上の命令で戦争を阻止すること、他の国も一緒に戦争の阻止に加わるべきだと、このような国際的協力が歴史の教訓の上で生かされるべきではないかと思います。

アフガンの戦争でアメリカは相当力んで戦いに行ったんですが、いとも簡単に勝ってしまった。それによってかえって今後もっと物量を頼りに、介入とか戦争に踏み切るという可能性が増えるんじゃないかと思います。歴史の中においてアフガン戦争というのは始まったばかりですし、ましてわれわれとしては、二十一世紀の総括は、もっと長い歴史的総括の上に立って出す必要があるのです。ただの物量優先論に引きこまれないように、決意、団結、そして各国間の協調というようなものをもっと大切にすべきではないかなと思います。二度とベトナム戦争のような悲惨な戦争が起こらないよう祈りつつ、この報告を終わります。